
馬鹿ですが何か？

祿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿ですが何か？

【Zコード】

Z9262Z

【作者名】

祿

【あらすじ】

まつたりと生きてきたとある馬鹿と、それに比べてキチッと生きてきた男が、神の手違いで死んでしまう。かわりにインフィニットストラトスの世界に転生させられることがある。

おまけに変な能力も付けられていた。
二人は、まつたりと生きて行けるのか？

唐突だけが俺は思い付いた。

命は一つであり、人間に前世や来世など”次の人生”はないと。人は死んだら、そのまま人格や記憶など消えて無くなる。

前世来世、天国地獄、転生蘇生などは人間の都合のいい妄想や想像でしかない……けつぎょくは存在しないものだと。

「…………で、結局なにがいいたいんだ?」

「やだなあ、てっちゃん。もうわかつてるくせに」

はあ、とため息をつく友人を飛び越えて親友（仮）の佐久間哲、通称てっちゃんは、めんどくさそうな顔をしながら見てきた。
まあ……あれだ。自己紹介しようとしますか。

「岡山祿 17歳男 乙女座で誕生田は想像に任せるとして血液型はO型だ。よろしくな!」

「誰に自己紹介してんだよ……てかさつきのは何なんだよ」

「いやあ、バスの中つてひまじやん?だから頭にポツと出てきたのがさつきなのだ。で、一度しかない人生を無駄にせず、しっかりと生きていくてほしつて言いたいわけ」

「たまにいいとつぽこ」と言つよな

そんな雑談をしながら、てつちゃんの高校に向かって歩いてくる。
てつちゃん曰く、今日は文化祭なんだって、もう毎年のことでな
にしてんだろうね？

重役出勤とはなかなか偉くなつたんだな。

「お前はまつとへと寄り道するからな。その間に田が暮れる」

「へー、そりゃ大変だつたね？」

「お前のことだぞー？」

ぼてぼてと歩いていると、横断歩道のど真ん中に金色に光る円形の
なにかが田に入った。

てつちゃんは気づいてないみたいで、ペペペペ何か喋つている。

「（）のまま気づかれないように確認して、500円玉だったら

回収（）

「（）にしつ絶対聞いてないな…今度は何を考えてんのや（）

金色に光る円形のなにかの横を通り過ぎるとまた横田で確認。
それは期待していた通りの500円玉だった。
車がこないのを確認して、すぐにしゃがみ込む。

「みどり危ない！」

「へ？」

横断歩道を渡つたところにいたてつちゃんが、すぐ焦つた顔をしていた。

右側がやたら騒々しくて、見てみるとトラックがこちらに突っ込んできていた。

避けようにも距離は25メートルくらいで、スピードも速くて、とてもじやないけど避けられない。

「……まじか？」

「ん？ 待てみどり。なぜ俺を掴む？」

「てつちゃんシールドー！ がぐ！」

「ぶるうわー！」

あえなくトラックと正面衝突。もちろん俺とてつちゃんは即死。

一度きりの人生をどうのこうの言つてた奴が友人というより、悪友に近いやつを道連れにするのは割と愉快（笑）

……………か

「……………」

「ああ……か……の……バカ……

「……………（ニヒリ）」

「おきんかー！」の馬鹿者ー」

「ううせえな……人が気持ち良くなっているのに耳元で騒ぐなよ、糞豚。
殺されたくないなら黙つていろ。食い殺すぞー。」

「……………（ウルウル）」

「み、みどり？少し落ち着けよ、な？」

聞き覚えのある声がしたので、そつちに目を向けると悪友でいたりも
んがたつていた。

「あれ？おかしいな……てつちゃんは俺が殺したはずなんだけど、
何で元気に立つてんの？」

「やつこえばお前……俺を道連れにしてくれたよな？」

「記憶にないな。改ざんされたかも」

「あー。そのことなんじゃが……あれはわしのせいなのじゃ」

口調に似合わないような容姿をしている女性（仮）は、申し訳なさそうに罪を自己宣告してきた。

よく見るとセミロングの黒髪で小柄、モロ好みに当たる。

「あなたのせいってビリーハーことですか？」

「ちと手違いでトラックをお主に確實にぶつかる距離に置いてしまつてのう……まさか友人を盾に使う鬼畜な奴だとは思つておらんかつたがな」

「だよねー、ちゃんと車がこないのを確認したのにトラックが來たのは不思議だつたからね」

「こん畜生……一度きりの人生をどうのこうのって語つたあとなのに無駄死にじやないか。

てかこの人は何物？ 果物？ たべていいのかい？

「食べれないから落ち着けみどり。話が進まない
「わしは神じや。まああれじや、お主達を転生をせる」としか償え
んがいいかの？」

「まあ生き返れるなら俺はいいですけど」

「（「転生へ…せりあがれ」を既定したばかりなのに）実在するところ新事実……
これは新たに新みどり理論を考えなきや（」

新みどり理論を考えている間も、話し合いは進んで行った。
交渉とかはてつちゃんにいつも任せきりなので、けつこうの信頼して
る。

いろいろ質問されたけど、できとうに返事しどいた。

「それじゃあ、転生をせらるんかい。準備はよいか？」

「はい」

「元の世界だよね？」

「いいや」

「え？」

てつちゃんの返答に驚いて「足元が光始めた。
てつちゃんに視線を戻すと、やつぱつたつて顔で教えてくれた。

「俺達がこくのはインフィニットストラトス……ISの世界だ」

「まてまてーそれは俺がまつたりできないといつ最悪のフラグが立
つてしまつじやないか！」

神（仮）とてつちゃんは微笑んでゆっくつと口を開いた。

「「どんまい」」

「「うぬせええ！転生中止！やめい！」

必死の抵抗はむなしく、光に飲み込まれた。

二人を転生させた神は一人の立つていたところを見つめてたたずんでいた。
そして自分の体を抱き、身震いすると顔を紅潮させてうつとりとした。

「.....ふふふ。みどり...か」

神はスウッと姿を消した。

次の瞬間にその空間は割れて無くなつた。

1 「ことひじゅじゅー」

俺は考えた。

前回、おつひよこひよいな神様に祿理論をひっくり返されたので、新しい祿理論が必要になったからだ。

今回は絶対ひっくり返されることがないよしだしなきやいけない…俺のプライドがやうしなきやこけなについて言つて。

「…………」

「…………あのう……団山くん? 田舎口紹介してくれない?」

「あつ、せー

いつね。

小学校の入学して一回田舎だつて出席番号が迷つてだるいねー、ほんとにめんどくさいやつな。

「あつはい。ありがとうございます。お腹減つてしまふので食べ物は給食のときしかでないよ?」

わかつてゐるつづり。

ちなみに俺は岡山家に生まれて名前はみどりだつた。

前世（？）と変わつてないのであんまり嬉しくないが、前世（？）の岡山家よりだいぶ自由度が高いからお気に入りだ。てつちゃんの方も前世（？）と変わつてない。

「佐久間哲です。よろしく」

「ね？ 変わつてないでしょ？ なんの面白みもない第一の人生だわ。そういうしてゐ内に授業が終わつた。」

「みどり、やつぱりあれと同じクラスになつたな」

「あーあれね。まあいいんじやないか？ 僕的にはほのぼの生活に水を差されない限り何かしようとは思わないよ」

「お前らしげつちやらしげ」

それから何ヶ月かたつたある日、いじめといつもの生まれて初めて生で見た。

割と愉快なものではなく不愉快極まりないもので、幻滅した。

「おい。おとこ女は一人で掃除しろよ」

「やうだぞ。この汚い机と教科書もなーギヤハハハハ」

ポニー・テールの子を複数の男子が囮んで、その子の机を倒して教科書をぶちまけて踏みにじっていた。

机にも落書きしてあり、いきますぐにぶん殴つてやりたいが、てつちやんに羽交い締めにされて動けない。

「おい、何羽交い締めにしてくれてんだよ」

「落ち着け、まずは落ち着け。最初は言葉からにしよう、いきなり暴力はまずい」

「仕方ないなあ」

「おい、何だよお前」

「あー、こいつは確かに女みたいな名前のやつだぜ？確かにみどりっていつたよな？」

「みどりちゃんとかおんな男だ！ハハハハハ」

ぶち

「お前「何してんだ！大人数でよつてたかって…」……ち

一夏登場で怒りゲージが一周回って安定ラインギリギリで止まった。
別に台詞遮られて怒ったわけじゃないし！

「なんだよ！お前、このおとこ女とおんな男の味方すんのかよ！」

「俺はお前達みたいに仲間が多くないとそういうこと出来ない奴が大嫌いなんだ！」

「なんだとー？」「のー！」

一人の男子が一夏に殴り掛けた瞬間に、俺はそいつの腹を思いつきり殴った。

泣きべそかきながらうずくまる馬鹿ーをほつとき、次々と殴り掛けつてくる馬鹿複数をてつちゃんと蹴散らしていく。

「てつちゃん。相手は大人數だから急所をついてけ、幸い全員男だからな」

「まあ、まともにやつたら面倒だし、手間かかるもんな

途中から一夏と笄（途中で気づいた）が参戦してくれたので、だいぶ楽に片付いた。

で、意外だったのが一夏と笄のコンビネーションが良かつたのは何となくわかつてたからいいんだけど、一人とも強いね。

「ありがとな、助けてくれて」

「「こえこえびつもびつも」」

「「せり、簞もお礼言えよ」」

「あ、ありが…どつ」

「「こえこえびつもびつも」」

同じことを繰り返し使う。
けつこう楽しいもんだ。

「岡山も佐久間も強いなーどこか道場とか行つてゐるのか?」

「俺は我流かな。あとみどりでいいよ」

「俺は「マイツの技の実験台にされることがあるからな。それで身についた、あと「てつちゃんでいい」……おや?」

「へー、みどりもてつちゃんも凄いんだなー簞も俺もけつこう強いんだぜ」

「わつきの見たらわかるよ」

帰り道が何故か大半一緒だったので歩きながらしゃべる。
さつきの男子は今頃職員室でお説教だ。

愉快愉快！

「…………」

「ん？ みどりはどうした？」

「あー一夏、みどりは時々きなづけられ事する」とがあるんだ。気
にするな

「なぜいきなりなんだ？ 哲」

「なんとかしらんけど、ふと氣づくことがあるんじゃないか？」

「へー苦労してんな」

そのまま家に帰り着くまで考え事は続いた。

考え方の内容はプールサイドに豆腐を並べるにはどのくらいの量の
豆腐が必要か、ということも下らないものだった。

それから幾年が立ち、高校入試の前日。

「時間進むの速いな。ありえないな。読者のみなさんにあやまれ馬鹿」

「何いってんのや！」

俺は受験勉強から逃げだし、海岸を散歩している。

鈴の帰国やらあつたけど、いい一年だったと個人的には思っている。ぽけーっと海を見ていると沖の方にプカプカと浮かぶ人型のものがあつた。

「ねえ……てつちゃん」

「なんだ？」

「あれって人じゃないよね？木か何かだよね？」

「ん……人じゃないと信じたいけど、どうみても人なんだよな」

「……」

しばらく沈黙。……あまりの出来事に頭がついていかなかつた。

今は2月、海水浴を楽しむような季節じゃないし、見た感じサーフボードを持っていない。

おまけに沖の方にどんどん流れされていつてる気がする。

「……まあいー。」

ハツと我に帰り、海に猛ダッシュする。
なりふり構つていられなくなるときつてあるよね？

「おーー！ みどりお前泳げないだろー！」

「水面を走ればいい！ いくぞ… 瞬足！」

水面を沈む前に蹴り、前に進んでいく。
てっちゃんからは人の形をした人じやない物を見るような目で見ら
れてる気がする。

緊急事態なら人は限界を超えられるんだ。

「よつとー。」

浮かんでいた人をつまみ具合に抱き、浜に戻つていく。
しかし足に限界が来たみたいで、どんどん重くなつていつて浜に無
事たどり着くのが難しくなつた。
ので、奥の手を使つことに

「佐久間哲ー受け取れえええええ！」

「うおおおおおーー。」

ドスン

「危ねえなー人を投げるんじゃないー俺がキャッチしなかつたらどうなつてたか……ん?みどり?……あれ?」

バシャバシャ

「……むつ」

「何で濡れてんの?」

「足に限界が来て、海にじぽん」

「なるほど、なら早く帰るぞ。ていうかこの子がうすんだ?」

てつちゃんが意識のないやたら見たことがあるよつた無こよつた感じの女の子を指差した。

この時期に海に入つてたんだから、俺より危険な状態なんだろ。

「迷つてるヒマはないね。ここからだと俺の家が近いから俺が連れて帰る」

「大丈夫か?」

「なんとかなるだろ」

俺は女の子を背負って、家に向かって走り出した。家の前にくると、てつちゃんが前に出て両手を下に組む。

俺は靴を脱いでその手を踏み台に2階の自分の部屋の窓のところまで飛び。

ジャンプする瞬間にてつちゃんが手を上に上げてくれたので、だいぶ滞空時間が稼げた。

蹴りで窓を開けてなかに転がり込むと同時に暖房を付けて、身ぐるみ剥がしへッドの中にぼうぼうと跳び込んで掛け布団をかける。

「ふう……あとはあいつの回収だ」

部屋を出て、階段を下りて玄関のドアを開けると、俺が脱いだ靴を持つて待っていた。

なぜかおまけにもう一人女の子を抱いで……。

「…………助けてくれ

「…………入れ

解説しよう。

てつちゃんは女子が苦手で滅多なことが無い限り、自分から女子に触れようとは絶対にしないが、恋愛対象になるのは女なのだ。本人もなかなか悩んでいるがどうしようもないでほつといてる。

「でだ、なぜにお前の部屋に入った瞬間に田に入るのが、ベッドで寝てる子が着てた服なんだ?」

「濡れたままじゃ気持ち悪いと思つて……大丈夫、下着姿は見てない。見ないようこしたから」

「身体能力全開でいったのか……まあ妥当だろ?」

「そういうながら坦いでた子を俺がひいた布団に寝かせた。冷や汗かいていたのは気にしない方がいいだろ?」

「田が覚めるまで何も出来ないな」

「覚められても困るけどねー」

「なんでだ?……つと、そうだったな」

俺は立ち上がり、母さんのところにいつて事情を話すと、嬉しそうに猫と犬のパジャマを持って俺の部屋にいった。

誰に着せようとしていたのか甚だ疑問であるが、とにかく第1の危険は去つた。

「ふふふ、似合つてよかつたわ~」

「もつ着せたんだ。はやいね」

いつもはすべての行動が遅いくせに

「可愛い子連れて来たわね。彼女さん？」

「事情説明したよね！？どうやつたらやつなるのやつ！？」

『あらあら～』といいながらキッキンに戻つていつた母さんの背中を見る限り、完全に勘違いしている。

「（ひつかし、海の子…ど）かで見たような……」（へ、転生直前かそれ以降に……なんだっけ？）」

考え事しながら部屋に戻ると、カッターが俺の頬を震めて通過した。飛んできた方向を見てみると、必死に説明しててつちゃんと凄い眼光で睨んでくるてつちゃんの想いでいた女の子がいた。

「ぶつちやけた話。その体勢は勘違いされるよ？」

「助けるよー普通に助けるよー。」

キッと睨んでくる女の子の前に正座する。もちろん手はみじかにあつた紐でくくつとく。すると警戒を少し緩めてくれた。

俺だけ

「なあ……何も解決してないよつに思えるの俺だけ?」

「あの、岡山みどりです。あなたは?」

「……江藤あつす。お前達は何者だ」

「漬け物、果物、くせ者、悪者、馬鹿者、生もの」

俺の返答が気に入らなかつたらしく、てつちゃんを簫巻きにしてから俺を押し倒してカッターを首に付けられた。
なんだか……心の奥から浮き上がつてくるこの感情は何なのか知りたい。

「馬鹿にしてるの? ちやんと答へないと殺す」

「ははは、やれるものならどうぞ?」

そういうながら自家製クラッカーをあつすとやらの田の前でならした。

白い煙りが彼女の顔目掛けて吹き出し、視界を殺した。

その隙にあつすの手からカッターを取り上げて、手に巻いといった紐で拘束して床に捩じ伏せる。

「ああ、何で氣を失つてたのか教えてもらひつかー。」

「……へー。」

悔しそうな顔をしながらひづらを睨むのをやめないありすに何だか申し訳なくなつてきた。

てつちゃんに助けを求めて視線をやると、『お前に任せたー。』と言ひ足そつな顔をしていた。

「えつどじめん。とにかく抵抗はやめよ。別にじつて食おつなんて思つてないか。」

「……」

「まああれだ。今から質問するからあつてたら頷いて、間違つてたら横にふつて。じゃないとパソコンをぶちまける」

「……（口ク）」

「今あらすは追われてこる

「……（口ク）

「……そこから裏の世界の者だ」

「あらすはそこつらと一人でやつてもくつちら」

「……（口ク）」

「（ノクノク）」

「正直お前は馬鹿だ」

- (১৪১৪) ১

大体の事情はわかつた。

あとはどうするかだけとこの世は安全な所なんてあるわけないし
あつ、あつた！

1番で1番の人が

「てつりやんー 夏に連絡だー!」——「うわー」

了解！

紐をほどいてやつたらすぐに携帯を取り出して、いろいろあの人についててくれるよつと手配してくる。

おにぎりは顔を真青にして、暴れだしたので、三三と同朋で押さえこめておく。

顔が真っ赤になつた氣がするけどコイツのためだ。

「はなせ！」の！」

「落ち着きなよ、君一人じや絶対にそういう人達には敵わない」

「やつてみなければわからないだろ？離して！」

「もう……安全な場所で普通の女の子として暮らしてほしいから、あの学園に入れてもうえるよ」に頼んだのに……」

「…あの学園つて？」

「HIS学園。エリートの集まりさ、そこに友人の姉が教員やつてつて、とあるウサミミに聞いたから行けるはずだよ？あ、友人の姉つて元世界一なんだよ」

ありすは俺の話を『ありえない』みたいな顔をして聞いていたので、そのままの体勢でイロイロ話してあげた。

ウサミミつて単語が出るたびにピクッてなつて、その人について質問してくるから、ありすという人間が少しわかつた。

2 「わんわんあぶつーわ」

割と題名にある名前のある曲がある気がするし、誰か作ってくれないかなと思つてたりする。

元氣で明るい曲になつたらいになつていつ願望。しかし、それぢこりではないのが現実です。

「……（ぱくぱく）」

「……（もぐもぐ）」

田の前の担ぎ込んだ少女二人は、よほどお腹が減つていたのだろうガツガツと食事を食べていた。

母さんも何だか嬉しそうな顔しながらドンドンと食事を運んでくる。

「……ねえ。じうじうの家の食事はこんなに美味しいの？」

「それはねえ。みじくんが強運の持ち主でお金ががっぽがっぽ入るのよ。だから高級食材を使つてゐる」

「へえ……あんたに取り柄があつたのね
「俺は割とスペック高いんだぞ」

「そりいえば佐久間つて人ぢこじつたの？」

「家に帰つたよ」

少し驚いた顔をしてこちらを見るポーテのあります。

どうやら俺とあいつは従兄弟か兄弟だと想つていたらしく。

「で、海で浮かんでた君は死んだの？」

「わしか？」

「わしあはお主らの後を追つてきたのじや。なかなか面白がった

のでな、体も人間と全く同じこしてるから問題ないぞー」

……まさかね。

あいつの隣の女子に体を近づけて、小声で話しかける。

（……まさか、おつちよーじゅうよーこの自称神様？）

（なつ無礼者ーわしあは正真正銘の神様じやーみじつよ、こなつこなつたら信じるのじや？）

（まさか追つかけてくるとは、たずが落つてしまふ。尊敬するよ）

（うぬぬー言つてはなうないとを言つておつたな……神の力想い知る

がいい)

(俺の勘で言つと、今のお前は治癒くらいしかできない)

! (כען)

悔しそうな顔をしながら料理を頬張つていく。頬つぺたが膨らんでリストみたいで可愛かつたが、なぜかありますに睨まれているのに気づいた。

「えつと...なに?」

「何でもないわ。それでこの子は何て言う名前なの？仲良さんうだ
し、知ってるんでしょ？」

「実は知らない」

「なんと！」

神様が驚いたような声をあげて、身を乗り出してきた。
すかさずおでこにデコピンして椅子に座らせた。

「…………まじつよ、おれの体は強化したのか?」パンンドも
「…………」

「へえ、初耳だ」

「ちなみに身体能力も上げてあるのじゃ」

「ほい」

「わしのことは敬意を持つて、そつじやな……恋とよべ」

「わかった、恋つてよぶ」

「人の話きこておつたのか？まあそれでもいいが」

ほむほむとグラタンを食べていく恋は、ありすに一瞥してから少しニヤリと笑った。

何考えてるのかよくわからない、まったく面白ないだから俺達を殺して転生させたな……。

プルルルルポロロロ

「おつと失礼」

一夏から電話がきたので立ち上がり、場所を移動する。

「はい」

『みどり、一応千冬姉には言つてみたら『出来ることがない、普通に受験して入れ』ってさ』

「果てしなくケチだな」

『でもなんで千冬姉なんだ？ ELS 学園ならその教員に頼めばいいのに』

「さあね、うーん。まあ妥当だろうね、仕方ない正攻法で行くかな。
ありがとうな一夏」

『ああ』

電話を切り、ポケットからある紙を取り出した。

その紙に ELS 学園と記入し、もつ一度ポケットにしまった。

「へへへ、千冬さん…俺の正攻法は他の奴とは違うよ?」

満月の夜に一人、庭に立ち悪い笑みを浮かべながら、家のなかに入つた。

次の日、朝早くに家を出て学校へ猛ダッシュした。

基本朝早く学校に行くが、それより早い、人に捕まえられたくないのと遅刻防止だ。

ちなみに9年連続皆勤賞狙つております。

今日は調子がいいでござります。…な・の・に！

「ふふふ……（一ノ二ノ三ノ）」

「…………むう」

目の前にいるセミロングの活潑そうな身長150cmの娘のせいで、教室に行けない。

普通なら身体能力を駆使して向かうといろだが、下駄箱の前に立たれると履き返れないので膠着状態。試験？そんなもんもう終わつたわ。

回想

「多田的ホールって広いよな、ありす大丈夫かな」

「ああ、迷子になるわけだ……次の扉を開けて人に聞くぞ」

「「賛成」」

ありすと恋と別れて、試験場に向かつている内に迷子になつ、俺とてつちゃんと一夏はフラフラしていた。

そうしてゐうちに一夏が扉を見つけて開けて中に入る。

「うーん。誰もいないよ？」

「あれ？これってEISじゃないか？」

「（まことに、あれに触れたらEIS学園行きか）」

「ヒツヂヤンビツト?」

俺はてつちゃんが険しい顔をしていたので、近くにあつた灰色のものによつ掛かりながら、声をかけた。
すると背中の方が明るくなつたと思えば、黒い服を着た人達が数人入つてきた。

「君達にこでなにしてるの!/?関係者立入禁止よ!」

「えつエスが男に反応してゐる……」

「今すぐ上に連絡を!」

まずいことになつた。

すつかり忘れてた……あれだ、ほらよくあるじやんつ!ヒツヂヤンと。

「おこ、みぢり……厄介な」としてくれたじやないか

「ヒツヂヤンビツト?俺達」

「あねえ……わいばー!」

「「あつー汚ねえ」」

一夏を踏み台にして女人の頭の上を飛び越えて廊下に飛び出す。そして出口に向かつて走った。

「までー。」

「待てといわれて待つ馬鹿はいませんー。」

「いづなれば実力行使だ！」

「追いつけるものなら追いついてみなー。」

回想終了

とこりうわけで学校に逃げて来たわけだ。

そしたらリリーマム娘が下駄箱の前に立つていて、それを物影に隠れて見物してるという状況が出来たわけです。

「（こ）こであいつを味方につけられたら、割と戦力になるんじゃないか？）」

「……みどり大丈夫かな？」

「（ん？）」

「あいつ行き当たりばつ当たりだから多田的ホールでやらかしてなきやいいんだけど」

「なんて失礼な！」

「えつー?」

ミーマム娘はいるはずもない人の声を聞いて驚いた顔をして振り向いた。

「普通受かってるといいなとがじゃないのー?」

「ていうかあんた受験はー?」

「あんまり思い出したくない」

いろいろやじかしてきたからね。
今は追われる身です。

「まつたく……あんたはいく先々で問題起こすわね」

「まあね。それで何してんの?」

「えつーあ、その……な、なんでもいいでしょー。」

「まあね……」

ふと、後ろを見ると黒い服を着た人達が出口を封鎖していた。皆さんの目を見るかぎり、怒ってるようでいらっしゃいます。

「我々ここで来ておうがつか

「ちよ、みじり向して来たの?」

「えつと、HIS触つてきた

「えええ…

じわじわと逃げ道を潰されて距離を詰められてきた。
後ろのミミマム娘もさすがに怖いりしく、袖を掴んできた。

「……うーん。目的は俺だからお前は危害加えられないと想つんだ
けど

「そ、それでも怖いものは怖いのー!わ、わるいー!…」

「いえ別に

完全に囲まれた状態で何かできないわけで、ボーッと黒服を見ていると近寄って来なくなつた。

すると黒服の後ろから一夏の姉の千冬が出てきた。

「みどり……お前何してん?」

「身の危険を感じて逃亡」

「一夏と佐久間はあの後、エリに触れて使えることがわかつた。い
ますぐにはどういひできるわけじやないから家に帰した」

「な、なんだと…それじやああそこで大人しくしてたまうがよかつ
たんじや」

「当たり前だ馬鹿者ー。」

「ゴシ

「びわ

「つれてけ

「げんこつで悶絶している時に担がれて運び出される。
これはこれで誘拐されてるみたいで心が躍る。

「お前もだ」

「えつ、あたしもですか?」

「ついて来い」

車に乗らされたら、隣にリリーママ娘が乗ってきた。

「これはタクシーではないのですが何考えてんだらうね。」

「あんたの巻き添こみ」

「へー、そりや大変だね」

「おや？拳を握りしめて震えておるではないか、怖いのかね？」

仕方ない手を繋いでやるか……巻き添いにしたんだからこれくらいはしてあげないと、置きざりにした一夏とてつちゃんに怒られる。

「ああ

「えつ」

「俺がいるから怖くないよ？」

「なにその理屈。すぐ説得力があるけどおかしいわよ？」

「すまないな、怖がらせて」

助手席の千冬がこちらを向いて話しかけてきた。

そう思うなら、左隣りに座つてゐる人の警戒の眼差しをやめさせてもらえないだろうか？

プレッシャーがすごいのですが……。

「い、いえ。大丈夫です」

「みどり。お前が逃げなければ、お前の彼女も怖い目に會わざにす
んだんだぞ」

「か…彼女…／＼」

「すいません……でも彼女ではないですよ。」の「ママ娘」と俺は

「なんですかー」

いきなり隣の「ママ娘が怒り狂え始めた。
これは危険色だ。」

「誰がママ娘よーまだまだ成長期来てないのよー」

「成長期来てて、それだと末期だよね？」

「くうー見てなさいよー高校卒業する時にはナイスバーティになつて
やるんだからー！」

「ほいほい。特に期待しないで待つてるよ

「つこたぞ」

車から降りて、広い部屋に案内された。

そこにはエリが一台とウサギの「ネコ」が一つずつ置いてあった。

「れでなこするのかな？」

「……」

千尋はウカミミが突き出している壁を思いつ切り殴りつけた。
あるときからヒラヒラと人が出てきた。

「こつたああい・ひーちゃんひーー」

「それではみじつ。HSに触れろ」

「あいよー」

核ミサイルの発射ボタンを軽く押すノリでポンッと触れると、HS
が光だした。

するとHSの中に吸い込まれるような感覚と同時に意識が遠くなっ
ていった。

「……んー」

気がつくと俺は地面はコンクリ、空は雲で隠れている殺風景などころに立っていた。

後ろに気配を感じて振り向くと、ボロボロのワンピースを着た小さい女の子がたつていた。

「……貴方、なんで生きてるの?」

「んー、神様に転生させられてね。第一の人生満喫中」

「もうじゃない」

「俺は俺のために生きてる」

そう答えると、女の子は俯いてフラフラと俺の周りを歩き回り始めた。

何がしたいのかわからないんですけど?

「……結局自分のためなのね」

「そうだよ? 例え、ばあの人と一緒にいたいから悪いものや引き離すものから守る、そして生きる。人間でいたいから、人間としての最低限のマナー やルールを守る、そして生きる」

「……最終的に、自分のしたいこと=何かを守り、生きるってこと

？」

「うー、まだわかんないや。でも結局自分の願いなんだよね。誰かと一緒にいたいとかってさ、だから自分のため」

「……ふーん。馬鹿な上に変な人」

「ありがとう。で、そろそろ戻りたいんだけど」

「……今日はほーじのくんでいいわ。またね（・・・）」

……り……み……ど……

「みどりー」

「ひやーーー」

ものすごい嫌な予感と共に意識が戻ると、目の前に拳が迫っていた。顔を横に傾けてなんとかかわすと、今度はアッパーが来た。かわせそうになかったので受け止める。

「ああ、よかつた。気がついたのね」

「その起こし方はいろいろまずいからね！」

「立つたまま動かなくなつたあんたが悪い」

「このミニマム娘め、いつか仕返ししてやる！
ゴキブリのおもちゃでな！フハハハハ

「まあISを動かせることはわかつた。これで3人と1人か……」

「何の数？」

男でISを動かせるのは俺と一夏とてつちゃんの3人、あと1人がわからんんだけど。

もしかしたら俺の思つてることとは違つことかもしれない。

「受験無しで、IS学園に入学する人数だ。それで君の名前は？」

「あつ、あたしは高橋美佳です」

「みどり、一夏、佐久間、高橋の4人はIS学園に入学だ」

「…………はあ」

「えつ？待つてあたし明日受験……」

「それは私が話をしておく。HIS学園の制服なども用意しておる」

「…………えええ……」

「あ、わかりました」

「それでは今田は解散

「これからめんどくさいこと田々が始まります。
ヘルプマーです。」

2 「わざわざあぶつー♪」（後書き）

「ねえ、みーくさんでやつぱつすいこね

「こきなつじうしたんだ?」

「こきなつじエリの人格とパリパリケーションといったんだよ?」
「なあーすじこなあーすーちゃん、このーこのパア貰うね

「……はあ、わかった。私が上元話を通しておへ

「あつがとー變じてゐよーかーちゃんー」（待つててねーすいこ）
（りかうちあひつ）

3 「入学式的な何か」

えー、みなさん。

大変申し訳ないのですが、前回の話で少しおかしいところがあつたのですが気にしないでください。

さて、どこの校長も話が長いのは万国共通なんだな。いい加減にしてほしいよ。

「次は生徒会長の話です」

「なげえ……」

（静かにじるよ、いろんなところで田立きたくないだろ？）

（たしかに）

（わしは平気じゃー）

（私は嫌）

（あつすの言つ通りよ。バカミドリ）

生徒会長が壇上に上がるといひにウインクしてきた。となりのてつちゃんの顔色が今にも吐きそうなくらい青くなつた。袋用意しどかないといけないね。

(てつひゅうてつひゅうせん、はい。穴開きペーパーランド)

(意味ないよね！？穴空いてたら使えないよね！？)

(まつまつま、気合いだ気合い…)

『 いじり、そこの一〇一二学園関係者から逃げた子との相方。おしゃべりしないの、おねーさんの話聞かないとダメよ？』

「 いめんなさい、視線恐怖症になるくらい視線を浴びてるものなので気分が……」

『 おねーさんが介抱してあげよ』「 全力で遠慮します。続きをどうぞ…』「 ちえー』

残念そうな顔をしたと思つたら、すぐに明るい顔に戻つた。きっとこの人小悪魔的な要素を持つていてるんだなと思つた。

(ん？ みどりびこのくの？)

(なんでわかったの？俺のこと見すぎだよ美佳

(なつ！別に見てないわよ！)

(せりばー)

ばれなによつに素早くパイプ椅子の下を通り、女子生徒にお願いし

て教師にバレないよう、出口に向かつた。

あとすぐここにこうとうで足を運けてくれない子に遭遇した。

(うのう)

（君、生徒会長に似てるね）

(! ! ! ? . . . ふん)

(……大人しいぶんこつちの方が可愛くみえるんだよな)

(.....えつ?)

(おへ！道が開いた。じゃね！まだどこかであつたらよろしく！)

体育館から出ると「一ノ一ノ」としたウサリリを付けた元気な子束さんが目の前に立っていた。
「どうなく嬉しそうに笑っている。

「さあがみーくんーあんな退屈な空間に留まれぬよいひな器じやない

よ
ね

「褒められてるのかわからないけど、ありがとう。」

「それでねえ。これあげるよー！」

そういうわっかのチーンを渡してきた。

それを受け取り一回捩つて手首をわっかのなかに突っ込んでつける。

「うんうん。やっぱり左手につけると悪かった」

やつこい、束ねんはペペハペペンと窓から飛び降りてビンかへいつてしまった。

入学式も無事に終わり、教室の席に座つてソワソワしていた。
ちなみに廊下側の一番前という速く帰れるといつりッキーな席だ。
後ろの美佳と左斜め後ろのありすの視線が痛かつたが、隣の席のてつちゃんの顔色が悪い。

(つちやんてつちやん)

(なんだ?袋ならこりゃとが、ましてや六開きなんて)

(ホットミルクココア)

(わかつててやつてるよなー?今俺がどうこつ状況かわかつてやつてるよなー?)

馬鹿なことちつてこないとマム先生が入ってきた。
小さこね、じう俺の方よつすこし上みたいたい感じ……あつ171あ
るからね俺は。すこし小さいね

「入学おめでとう」やこます。私は副担任の山田真耶です、一年間
よろしくお願いしますね」

「お願こちまー……します」

元氣よく返事しづつと黙つたら、素晴らしげ具合に噛んだ。
ミーマム娘やあつすなんて口を押されて笑つてゐし、周りも「か
かわいーー」「わまつて……ふふー」「的なつぶやき聞こえる」。

「大丈夫!先生何も聞こえてないからね、ね?」

あづくのせいでこれだよ。
泣けてきたわ。

「えりと出席番号順で自己紹介していくください」

「うーん。出鼻くじかれた…………何者かの陰謀だよな？」

誰だこのやつ……掛かつてこいや、やつぱり来ないで平和が一番。

「次岡山くん」

「岡山みどりです。わつを噛みましたが、わざとですウケ狙いです。決して素ではありませんので、あと趣味はゲーム読書考え方寝ることです。」

やつして各々自己紹介を終わらせた。
そして休み時間突入と同時に一夏が簞に連れていかれた。

「……お熱い事で」

「お似合いだよね。昔からわ」

「ふむ、確かにのう」

「でも織斑君は篠ノ瀬さんの好意に気がついてないんでしょう？」

「あたしにはそう見えるわ」

てつちゅんと恋、ありす、美佳は俺の机の周りに集まっている。

他の子は何故か俺とてつちゃんと一緒に夏を遠巻きに見物していくのと、スペースが有り余っている。
そして俺は動く気がない。

「やういえばTTSの知識なんてかけらも持っていないよ?」

「あーおれもだ」

「あたしは中学生で一応基本的なとこを習つたから平気ー。」

「私も。とこつか独学でこりこりやつてんから中学生レベルへりこまでなら平気」

「わはは……ダメじゃな」

恋がうなだれでいるのを、美佳が頭を撫でて慰めている。
ちなみに恋は制服を巫女服みたいにしている。
ありす、美佳、てつちゃんはノーマル。

「それにしても、どう行ってもみどりの服装はあまり変わらないな

てつちゃんが俺の制服を見て、やうつぶやく。
少し背中の方が長くなってるからやう思われても仕方ないか。
ちなみに小細工してあります。
その影響で長くなつとつます。

「一応言つておぐが、危ないものはその制服に入れておくなよ

「なぜわかった！エスパーか！？」

ゴッ

「あひー！」

いきなりげんこつをされ、地に伏せる。
決して痛すぎてではない、追撃をかわすためなのだ！
振り向くと織斑千冬が立っていた。

「岡山、危険物をだせ」

「ははは、何いってんのや。持つてるわけないじゃ」「はやくだせ
…はい」

上着のなかに手を突っ込み、ペットボトルとホツカイロ、七ツ道具、
ペンチ、USBメモリ、鉛筆、チヨコボールを出した。

「ふむ、ペットボトル、USBメモリは爆弾。ホツカイロは煙幕、
その他は他の目的に使うのか」

「なかなかの洞察力ですな！軽く見られただけで見破られたのは初
めてですよキヤイイン」

「ほんこつー発射いただきました。

怒気が田に見えるくらい凄まじいものになっていた。

「IJKの学園に反乱を起しそうもつか?」

「違いますよ……、ちょっと耳を」

勘違いを生むのはよくないので聞かれちゃいけないこと話やつ。
仕方ない仕方ないちょー仕方ない

（一夏やてつちゃんや俺はIJKを動かせる男つていうつイレギュラー
なんですよ?）

（そんなものは知つている。ならながこIJKこれを持つてくる必要
がある）

（IJK学園とて人が運営、整備、監視してるものです。必ず穴がある…そこに付け込まれて狙われでもしたら大変じゃないですか。丸腰で戦うのは無理ですよ?軍人でもあるまいし）

（たしかにな、だがここは世界で最もセキュリティの高い施設だ。
そう簡単に進入を許すとなると相当な相手だな……）

（はつきりいいますが。丸腰だと一夏の安全は俺もてつちゃんも保障できませんよ?3人一緒にいるなら別の話ですが、亡靈さんには
敵わない）

「はあ……わかつた。でも爆発物はダメだ、せめて刃物にしておけ」

「了解！」

そういう、袖や裾など服の間からゴムボールやらスーパー・ボールやら取り出した。すると織斑先生はどこからともなく段ボールを取り出して、そこにいれさせる。

「よくもこんなに作れたな」

「はい。それと世界で最もセキュリティの高いのはウサマ!!さんの近くではないでしょうか？」

「……ふふふ…ははははは！たしかに、あいつのそばなら安全だ」

織斑先生は爆弾が大量に入つた段ボールを軽々と持ち上げて、教室をでていった。

その瞬間に美佳が俺のみぞに改心の一撃を入れた。

「ちょっとみぞりー何危険な物隠し持つてんのよー」

「ぐう…待て美佳、話せばわかる」

「うぬせー！」

ぱきこー！

「ぐえー！てつちやん！助けてくれー」のままじゅもう死んでしまつ

てつちやんにヘルプを出したは良こものの、軽く無視された。

「あの、佐久間くん？私小南つてこいつの、一年間よろしくね

「ああ、じつはよろしく

「佐久間くんはどんな本が好きなの？」

「俺はラノベとかかな」

「私もラノベ好きなの！バカテスとか面白いよね、最近明久神懸かつてるけど」

「たしかにな、なんか最近輝いてるんだよなー。高城つて愉快な性格してるのもウケたし」

「おー！てめえ助けるやー。親友が死ぬぞおーー」

仲良く話してる最中申し訳ないと思つたが、事情があるので遮りせてもらつ。

死にたくないし、さつきから美佳の拳が赤く光つてゐるよつて見えるし。

「俺とお前は親友でわないと、悪友だ！」

「友にはかわりないだろーたすきやー！」

「まだ生きてる……はやく片付かないかな

「やめて！死にたくない！」

「チャイムはなってんがーーはやく席につけ！」

織斑先生の登場で事態は急速に収拾され、退屈な座学が幕をあけた。もちろん開始5分で諦めた。

「ですから、EUSには

「

（へー、あつとくるーずっといつ店のケーキ美味しいんだ……ここまで来たことなかつたから知らなかつたなあ）

「……で、そのバリアのおかげで操縦士の命は最低限守られるようになつて」「

（ええ……この学園にも筆記試験あるの？実技だけでいいじゃん……あつ体育がある。EUSの実習が体育と同じだと思つてた）

「えつとこ今までわからぬことがある人いますか？」

「はーー！」

「岡山くんどこがわからないんですか？」

「あーとくぬーずつていつ店の行き方がイマイチわかりません！」

「あー、あそこはまずモノレールでこの島から出ですぐの駅の南口にありますよ？今度一緒にいきますか？」

「えーーーするいよ先生だけー、私も岡山くんと行きたい！」

「私は織斑くんと！」

「私は3人と行きたいな。囮まれてみたい……」

ガゴォン！

物凄い音とともにみんなの口が塞がる。
もちろん殴られたのは俺であります。

「岡山…お前開始5分で諦めただろ？その上関係ない考え方して店の行き方を教えてもらひつとは良い御身分だなあ」

「すいません……ちょっとばかしやり過ぎました」

「高橋と佐久間はこいつの面倒見役。江藤は夏樹の面倒見てくれ、
そいつはどうも抜けてるところがある」

「「「はー」」」

「納得できない！初日から皿をつけられるよ！」とした覚えがありません！」

「脳みそクリーニングにだしてこい！」

「ひどい！」

先生に口答えしていると美佳らしき人から強烈な一撃を顎にくらった。
気がついたときは最後の授業の終了10分前だった。

3 「入学式的な何か」（後書き）

主にみどり視点ですが
これからはもう少しこじえていこうと思こます

4 「セシリアス」

あれから山田先生に寮の部屋番号とキーを貰つて、部屋に行くと//ニマム娘がスポーツタオルとパンツ一枚といつ姿でシャワーから上がりてきて大変だった。

てつちゃんと一夏と恋とありすは同じ部屋だと聞いた。
なんで俺だけ仲間外れなの?といつ疑問は置いといて、今一番の問題は田の前の真っ赤になつてゐ//ニマム娘だ。

「うー……責任とつて!」

「人をボコつておいてそれですか…………ていつか服くらこ着て出でこいよ」

「だつて暑かつたし……みどりはまだ来ないつて思つたし……」

「なんだ、俺が来るのわかつてたなら尚更着て出でこいよ。俺じやなくて他の肉食男だつたら、今頃ベッドの上でめりやくめりやにされてるよ?」

「……あ……」

いきなりしゅんとなつて、表情が暗くなつた。
女の子には言つちゃいけないことだったのかな?ビリヒシヨウ。

「あつと…俺は可能な限り、そういう人から美佳を守るつもりだけ

「べ

苦し紛れの言葉です。

すいませんでした、気の利いたことが頭に浮かばなくてさ。基本こういうシリアルアスはめっぽう弱いから、出来るだけ茶化すんだけど、時と場合によるよね？

「ばーか」

そうこうとベッドのシーツを体に巻き付けて、俺の上からどうぐでくれた。

俺は「ロロロロ転がつて窓際に立つて空を見る。

「わかつてると思つたが、じつを向いたら責任といつてもうつからね！」

「あいよー

しかし、なんたって男女同じ部屋なんだろ？

俺は他の人より、性欲が薄くてたとえ全裸の女の子に押し倒されても自制することができるし、神経太いからいいけど。

これはあつれ自慢ね、転生したからって生き方変えようとも思わないぜ！

「しかし、まあ着痩せするタイプなんだな、胸とか」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺して責任取らせる……」

「待つてえーーーめんなさーーーめんなさーーーつて……え」

「ん？ どうしたの？ 死ぬ覚悟できたの？」

「オレンジのワンピース似合つた。ちょっとその嫁で食堂に行こうって待つてーなんでもうつなるのあああーーー」

美佳の手を握つて廊下を歩いてると女子トークが始まった。まあ視線がこいつに向いてるから俺達のことだらうけど。

まさか付き合つてるのかな？

なんか仲良かつたもんね

ええーーじゃあ囮立くのはだめなのーーー？

しつーー聞こえやがつ

うーん。なに話しているのかわからないけど、いろいろ誤解がしうじてゐる気がする。

そのうち誤解を解いたことがないとな、みんなに迷惑はかけないよつて

努力しなきゃいけない。

食堂に入るといつちゃんの表情が固まっていた。

「一夏、ここにいましたの？」

「ああ、今みゆつの話をしゃべった瞬間にお前が入ってきたから、驚いてるんだと感づ」

「ばー一夏それは

「まあ覚悟はしこともいらつよへつちやん

「すこませんでしたー！」

食券を買つておばちゃんに渡すと、何か微笑ましいものを見つけた
ような顔をして料理をだしてくれた。

何がどうしたんだろうか？

なんだか周囲もソワソワしてゐし、なんだか居心地が悪い。
てつちやん達が上口抛してゐる机に向かう。

「うーん。てつちやん、凄く居心地悪いんだけど」

「んー、なんか変な噂が流れてるらしくてな。そのせいだろ」

「ま、初日からあれだけ騒げば噂くらう流れてもおかしくなこのへ。
みどりは問題児じやからな」

机に伏せながら答えた恋の髪に爪楊枝を絡ませとぐ。それに気づいた恋はからまつた髪を地道にほどいていく。

「で？なんでお前は高橋の手を握つて登場したんだ？」

お前の決断力には誰も一いつ切せんしかこな?」

てつぢやんに褒められたのかはよくわからないけど、ありがたい言葉を貰つた。

「君達が岡山みどりとそのアーティスト?」

「おおー、ここにいるメンバーは俺のファミリーだったのか!」

「初耳だな」

「馬鹿なこといつてないの。それで君がI.S学園の関係者数人から1日逃げたっていうのは本当？」

「正確に言ひなら1日…24時間も逃げてないよ？逃げたのは本当
だけど」

「そりゃ。それでオレンジのワンピース着てる子とおもひつてるのも

本当?「

「……な……／＼／＼

「違いますけど……ひひしてそんな話をじてくるんですか?更識楯無生徒会長」

彼女の名前を出すと、田がスウッと細くなつた。

このメンバーで戦闘要員は俺とてつちゃん、一夏だけ、運が悪いことに一夏は篳に出口を塞がれていて、てつちゃんは何故か真ん中にいたので出れない。

「こと」で万が一のことがあつたら俺が対応しなきゃいけないという事になる。

めんどくさい

「ふふふ、貴方周りがつぶやいてたのを聞いて言つたわね?」「ばれてましたか

「うう」と笑うけどお互い警戒心はとかないつもり。

「貴方入学式の時に妹にセクハラを働いた疑惑があつてね、それを問い合わせにきたの」

「あー、だから逃げたの知つてるくせに聞いてきたのか……。妹さんねえ……ああ、あの子か」

指を指した方向にその子がいた。

しかもジト目で睨んでいる……俺じゃなによー余韻をだよ。

「くつー・簪ちゃんに睨まれたじゃないー！」

「俺のせこじやないですよー。ねえ？」

妹さんに向かって同意を求めるとき直に頷いてくれた。
それよりも食べていのびんが美味しそうで美味しそうで……ジ
ユル

「みどり、ダメだよ？ 人の食べちや」

「はーい。そういうば恋、お前苗字びつしてんだ？」

「夏樹じや、今日織斑先生が言つておつたではないか

「あー、夏樹つてお前のことだったのか……」

「それよりみどりくん？ 簪ちゃんとはどうこの関係なの？」

「それ以上はやめた方がいいですよー。さつきから妹さんの方からび
りぴりした空気がきてるんで」

会長さんは顔を少し考え事してます的なポーズを取る。

俺のことをジーッと見てから、一ヤコと笑つてからそれをとがつて行つた。

次の日、前日と同様に開始5分で諦めてポケーッと考え方しているときのことだった。

「ああ、そうだ。クラス代表を決めないといけなかつたな」

「……（ぽけー）」

「クラス代表？」

「まあクラス委員と思つてくれ、来週にあるクラス対抗戦にクラス代表と副代表が出て競う。何でもいい、誰かやりたいやついるか？」

「……（ぽけー）」

「はい！織斑くんがいいと思つます」

「えつーおれ？」

「佐久間くんもいいと思つます！」

「岡山くんがいいー」

「……（ぽけー）」

どんどんと意見があれやこれやと出でるのにも関わらず、ぱーっとしてみどりをあたしはいつも後ろから見ている。

中学でもこんな感じだつたな。

あつ、みどりがナレーション放棄してるので美佳がお送りします。

「……（ぽかー）」

「こつまでほうかいるのやア……」

「他にはいないのか？今出た者で多数決をとるが

「納得できませんわー！」

強く机を叩いて立ち上がる縦ロールの子の表情は、怒りに満ちあふれていた。

みどりが思考の海から帰ってきたのでナレーション変わります。

「男がクラス代表なんてとんだ恥ぢですわ！だいたいこんな文化も後進的な野蛮な国にいること事態不満があるところに」

「それって文化レベルが低いってこと？~」

「やうですわ。日本なんて都心に行けばチャラチャラとした人がいて、田舎にいけば貧乏臭い人がいる。許しがたいですわ」

「いめん」

「お前……」

「一夏が何か言おうとしたところを睨みつけて黙らした。何を言つのか楽しみ過ぎたまらないのに邪魔されるのは嫌だ。

「ふん。貴方は高橋さんの犬みたいですから、私の犬になるんでしたら可愛がつてあげてもよくてよ?」

「ちよっとーみどりは犬じゃないわよー」

ミーマム娘は俺が金髪さん、セシリ亞で遊んでることを知つても耐えられなかつたみたい。あつすのほうも限界に近い感じかな。

てつちやんと一夏と篝は呆れたような顔してゐる。恋は寝てる

「あり?違いましたの?家畜だからヨウ学園の関係者から怖くて逃げ出しそうと思ったのですが…日本の男女ともに家畜ですか…貴女は他の男の玩具にでもなつてればいいですわ!」

「…………他の男なんか興味ないし」

「あり?昨日部屋で下着姿のままこの犬の背中に座つてたつて曰撃情報があるのですが?結局男は女を玩具としか見ない野蛮な生き物ですか?」

「…………」

ミーマム娘は案外メンタルが弱い、だからいじるときは細心の注意が必要なのだ。

だが、セシリ亞はお構いなしにミーマム娘のことを侮辱していった。そして俺の限界を超えた。

「……」

「あらあら、今にも泣きそうな顔で睨まれても怖くありませんわよ？奴隸さん

「死ね」

「！？」

セシリ亞を後ろに立ち、袖から刀身が赤い刀を引き抜いて切り掛かる。

しかし、慌てて飛んできたてっちゃんに手を叩かれ刀を落としてしまった。

「……ちつー」

「あなたなにをー」

すぐにはいってしまったセシリ亞との距離を詰める。

セシリ亞は慌てて正拳突きで迎撃してくるが、ギリギリでかわして、

また袖からナイフを出して首をかぎ切ろうとしたら、一夏にナイフを木刀で弾かれそのまま取り押さえられた。

「…………」

「岡山、何の真似だ

「…………」

「待ってくれ、千冬姉。みじきまでは落ち着け、こんなことしても何もならないだろ?」

「…………」

セシリ亞を睨みつけ、全身の力を抜く。するとてつちゃんの拘束が緩むが、今更何かしようと言ひ残はない。それよりどこかにいった美佳が心配だ。

「行ってこい」

「そだね。それとセシリ亞悪かったよ、今のはやり過ぎた。ごめんなさい」

ペコリと頭を下げて落とした刀とナイフを服の中にしまつていく。拘束されて気づいたんだけど、てつちゃんの制服って刀とか銃とか効かないように作られてる。

「お待ちなさい。」そのままやられっぱなしで終わらせんわよー。決闘なぞ。」

「あーはーはいわかったわかった

てきとうこあしじりって教室出でいく。
あいつの行くとこなんてたかがしれで
俺は廊下を全速力で駆け抜けた。

私は卑怯だ。

また逃げ出してしまった。

中学時代は小やうとか、気取つてるとかつていいやもん付けられて
イジメられた。

そのたんびに保健室に逃げ込んだ。

毎回毎回、保健室の先生もウンザリしていたのもわかつていた。
でも、私の居場所はそこにしかなかつた。
でもある日、私は出会つた。

『ん?誰かいの?』

『(ー?誰か来た……また何か言われる)』

『おっ、高橋さんじやないか。体調悪いの?』

そして少年は一コラと笑った。
これがみどりとの出会いだった。

『……国へんなにへりつてゐるんですか?』

『ん?ちよつと面白こものだよ?』

『面白ですか?』

『うん。じよりて色んなものあるからねーあとみどりでこよ?その敬語もダメだよー』

『えつ……でも』

『「ーん、人にまえに自分でやれか……。美佳、俺のことねみどりしてよーー』

『あ、いいの?』

『当たり前でしょー。』

みどりはちよつこつて紙に難しい何かの暗号みたいなものを書いた。

みんなは私を邪魔物扱いしてくるのに、どうしてみどりは明るく接していくのかわからなかつた。

クラスで人気者の一夏くんと一緒にいるの。

『み、みどりは何であたしに優しくするの?』

『……イジメられてるでしょ?男子には奴隸とかいわれて、暴力やら嫌がらせとかされてるの見たんだ。で、そいつらボコして君を追つかけて來た』

『なんで?』

『居場所ないとか考えてそうだったからで、居場所ないならおいでよ。一夏やつちゃんは面白いぞ?』

『えつでも……』

『いいからいいから!』

みどりはあたしの手を握つて保健室から出ると、入り口近くに一人はいた。
二人とも優しかつた……他の人とは違つて、それからみどり達三人は私を守つてくれた。
嬉しかつた……そしていつの間にかみどりが特別な存在になつた。

「……だからあの子の言つことが許せなかつた」

ボソッとつぶやくより言つた言葉は誰もいない保健室に溶けた。
するとドアが開く音がした。

「（先生が戻ってきたのかな）」

「やつぱりそこだったのか」

「……？」

カーテンをあけるとみどりが立つていて。

またドアが開いて佐久間くん、ありすに恋が入つてきた。
何故かお菓子やジュースが沢山入つた袋を持つて……。

「え？ なんでみんなはお菓子とか持つてるの？」

「俺が学園中に隠しておいたお菓子とか取つて来させた。つづつ
ても校舎のなかだけだけど」

「はあー？」

学園中つてどんだけ広いと思ってんのこのバカ！
いつ隠したのかは追い追い聞かなきゃいけないみたいね。

「大丈夫かの？大変傷心だつたみたいじゃが

「あの金髪の『ひづ』とは『氣』にしなくていいと思つわ」

「ありがとう」

「なんだか暖かいなあ……。

「みどりが調子に乗らせるからだわ」

「乗らせた覚えないし、遊んでただけだし。そんなことよつ部屋に行こつよ。織斑先生からお許しが出てるんだしわ」

「全く、みどりはなんでこつも……」

「まあ仕方ない。ああ、それと決闘は今週の日曜日だそうだ」

「あいよー」

その後、何故か広いありす達の部屋ではなく、あたし達の部屋でお菓子パーティーをした。

深夜まで騒いでたら織斑先生が来て、首謀者のみどりを肅正していくつた。

5 「しょーたいむ」

なぜ題名が平仮名なのかといつと俺が英語が苦手だから。納得した？そして今は日曜日、アリーナのピットにいたりします。

「…………一夏とてつちゃんにはエリが届くのか」

「もう一つ日もあるじゃんにはエリが届くのか」

恋と一緒にセシリアのエリを眺めている。

セシリアは何だか『私を見て！』みたいな顔をしていて面白い。やべつにやけてきた。

「しかしお主は元の世界では、重要な存在だったらしいの？」

「やつなの？普通の高校生だつたはずだけど」

「お主が死んですぐに、大地が割れ、火山は休火山、活火山関係なしに大噴火。海は大荒れで巨大な津波があらゆるところを飲み込むところじゅうだった」

「へー、タイミングがよかつたわ」

「違うのじゃ、他の神によるとお主は、あの世界の自然のバランスを取る又は自然を操る力があったそうじゃ。ま、もつとも後者の力は目覚めていなかつたがな」

「でもセリフはならなかつたんだろう?」

「うぬ、最高神は元の世界の異常を止めるために、この世界のバランスを崩した。お主がいるから平氣だからのう」

「めんどうせいな、てつちゃんは?」

何だか複雑そうな顔をしたダカーポの小鳥遊まひるにそっくりな顔をこちらにむけてきた。
なんだか聞いたやいけないような気がしたけど…………まあなんとかなるだろ。

「あやつは不幸よのう。将来は若き社長であったのに……、お主の面倒見役だったとは」

「ふはつーあははははーそりや不幸だ!」

「しかもそのまま行けば、お主と哲がタッグを組んで無敵の何でも製造会社になつていたのじゃが」

「あははははー有望な人材が手違いで死ぬつて、しかも俺の面倒見役つてふははははー!」

爆笑していたらセシリヤが何だか不思議なものを見る目で見てきたが、自分が笑われてると思ったのか、顔を赤くした。
別にあなたを笑ってるんじゃないんです。

『岡山、せやへ』

アナウンスで迷子のお呼びだしが掛かった。
笑いをこじれながらパートの中に退散していく。

「遅いぞ」

「すいませんね」

一夏はすでにTシャツを着ていた、てつちゃんもだ。
最初は俺対セシリア、一夏対てつちゃんでやるやうにして。

「岡山もTシャツを展開しろ」

「…………？」

「束から貰つてるだろ？へー」

袖を少しまくつて手首に巻き付けてあるチーフを見つめる。
これがTシャツですか？ ためしに呼び出してもみるが、本当にTシャツだったみたいだ。

「…………で、何でこんななどす黒この？』

「「「」お前の性格を表したんだわ」」

一夏、千冬、篠、てつやんに歯を揃えて言われた。
俺は「んなに黒くなこせー！」

「あつ、マム娘よー！あんたなんか無色で十分やー。」

「やうね、せつゆし汚こ黒だわ

「誰がマム娘よー！あんたなんか無色で十分やー。」

ああもうダメだ……。

セシリヤでストレス解消しよう、するしかない。
さあ行こつ、この前のこともあるしね……ふふふ、俺は一夏もてつ
ちゃんみたいて過ぎたことを気にしないタイプであるチビ、今回は
違つぞ？

「みどり、黒ひやん…こせまーす

空に飛び出すと、セシリヤが腰に手を当けて誇りげな顔をした。

「逃げ出さずに入れたよひですわね……私に負けたらあの小娘共々、

私の奴隸ですから。とベリーダンス娘はボロボロにしてあげますナ
ビ

「そりや勝たなきやな

そういうながら腕部のチーンを伸ばしてセシリアに攻撃をする。セシリアは後方に走って下がつてライフルを構える。

「こきなり攻撃してくるなんて無礼ですわよー。」

「悪いけど、ナレーションはまともに出来そうもないからオートで

「はあ？」

「こく

みどりは両腕のチーンを巧みに使いセシリアに攻撃を行つ。セシリアはライフルで狙い撃つが、チーンに阻まれて攻撃が通らない。

「ほひびひた?遠距離が近距離に負けるのは恥ずかしいぞ?」

「10メートルくらいですわね。そのチーンの伸びる範囲、なら近寄らせなければいいだけのこと。」

セシリ亞は距離を取つて射撃を何度も行つが、すべてチョーンで搔き消されてしまつ。

そしてみどりはあることこゝりづいていた。

「（）のチョーンで受け止めたエネルギー弾とかレーザーつて、このチョーンに吸収されてるのか……すごいな。しかもチョーンにエネルギーを溜められて任意でエネルギーが補給できる（）」

「なかなかやりますわね……HSの起動が2回だとは思えませんわ」

「HSの起動は3回だよ？多田的ホールで起動させて、また起動させられて、今回の回で3回」

「あ、やうなんですか？」

「操縦はてつちやんや一夏とは違つて……初めてだけね！」

「なつー！」

瞬時加速イグニッシュンブーストを使って、一気に距離を縮める。セシリ亞はとっさに上昇して、レーザーを撃つて来るがあえて避ける。

「俺はめんどくさがつて、内緒で行われた模擬戦に参加してないんでね」

「嘘ですわ！」

チヨーンをしまい、背中のたたんでいたウイングスラスターの羽を開く。みどりは楽しそうにウイングスラスターの羽の先端からレーザーを出す。

「この程度！……………つ！」

ひょいひょいとかわしていくセシリアだが、レーザーが曲がって追尾して来る。

セシリアは信じられないような顔をし、直撃した。

「あー、あれだ、どうせのおとしものであつた《アルテニア》ってやつじゃない?」

「アーティストのアーティスト」

壊れかけのライフルで最大出力でレーザーを放つ。

みぢりは冷や汗をかきながら、「ソレで避けたらつまんないよな」という考えに行き着き、じつとする。
そしてレーザーに飲み込まれる。

「はあ、はあ、やりましたわ

セシリアはライフルを捨てると空中でライフルは盛大に爆発した。もう武器といつても武器は唯一の近接ブレードだけになっていた。煙のなかをじっと見つめて、みどりがどれだけの損害を受けているのかを確認しようとする。

「…………そんなバカな」

「ん？ あーあれだよ。なんていつの？」

煙が晴れると、みどりがまばゆい光を放つチョーンを回しての姿があつた。

見た感じ無傷であった。

「な…………そんな……」

「俺の周りにいる奴を泣かした罪は重いよ？ あとここ」と教えてあげる

「なんですか？」

「俺は一夏とてつづけやんの中で一番弱い」

「何を…」

セシリアはインターフォンを開いて、切り掛かって来るがあと

少しのところで止まる。

観客席にいるクラスメイトやセシリア本人も、驚いていたが気にはない。

「そらー。」

「あぐつー。」

チェーンを鞭のように使ってセシリアにたたき付ける。

逃がさないよう逆方に腕の腕のチェーンでセシリアを固定して何度もたたき付ける。

チェーンの先端は下が長いダイヤみたいな形をしていて、そこに触れたら大変危険なのでそこだけセシリアに触れる寸前に量子変換して消している。

「（アーラン。もう少し性能を試したいな……）」

「ぐ……あ……あ」

セシリアの状態を見る限り続行不可なので、拘束していたチェーンとたらしているチェーンを腕部にしまつ。

セシリアはそのまま地面にゆっくりと降りていった。

「はあ……はあ……貴方は何者なのですか……」

「んー、まあね」

悔しそうに睨んで来るが、ボロボロだから寧ろもつとたたきのめし
たいつてこう感情が出てくる。

セシリ亞に「さうひとつすると、アザーがなり勝者を叫ぶトナウン
スが流れた。

「…………」

「…………はあ」

俯いて座り込んだままのセシリ亞に近寄る。

ピットから出でたてつちゃんと一夏も、じつに飛んできた。

「まあ…………いいんじやないか？負けたつて」

「貴方に何がわかるところの？今まで一生懸命努力してきた私の氣
持ちなんて貴方にはわからない」

「確かに、一夏とつちゃんに任せたーわいせ

いつものように逃亡開始。

てつちゃんもやれやれみたいな顔をして仕方なく元セシリ亞の方に向き直った。

ピットに戻ると、めず最初に飛ん出来たのがダブルラリアットだつ
た。

「ぐえー。」

「なにしてんの?か弱い女の子にあんなプレイ

「変態、変態は死ねばいい」

「酷いもんだ……つー。」

何かに引っ張り込まれるような感じがすると、フリッタと倒れる。倒れる場所が悪く、ピットから落していく。

「平氣よ。あの程度じやね」

「す、ぐ頼もし」

前に来たときは少し雰囲気が変わっていた。
すこし明るくなつたといふか綺麗になつたといふか。

「……ん、それで私を使ってみてどうだつた?」

「ふうん。束さんがあの打鉄の「アアを使ってこれを作つたのか……。
チエーンが危険すぎない?」

「セウ? メリットには『メリットが付き物よ』

「ハイリスクハイリターンですか」

「貴方としてはハイリスクノーリターンの方が燃えるんだうナビ
ね」

「でもあのエリツてす、ぐ燃費悪いよね? チエーンの能力がなかつ
たらアルテミスなんて使えないよ?」

「冗談抜きで燃費が悪い。

セシリ亞にお見舞いしたらエネルギーが残り少なくなつたし。

「ふふふ、チヨーン以外の近接武器を使わなかつたくせに……」

「チヨーンが破壊されたときのための近接武器だつたのか」

「ええ。相変わらず、おかしなこと考へてるのね」

「え、」

「ラーメン食べたいとか、眠いなあ、そういうえは布団畳んでないや、細い腕のどにあんな力があるのやらとか……クスクス」

考へていたことを読まれて恥ずかしくなつた。

このエリの世界つてエスパー多いよね、冗談ではない！

「あら、外で大変なことになつたから行つてあげて」

「呼んでおいてそれかい」

「またこれるでしょ？それに私は貴方のそばにいる」

パチッと目を開けるとマスクをした人達がメスや針や糸を持って、俺の体に何かしていた。

頭を起してみると、あらやだ、俺の腹が裂かれてるでないですか。

「…………えつー岡山へんー?」

「えつとんの声は山田先生ですね?ふああ……」

「寝てくださいーー困りますよーー…………これがまあ岡山へこの悲鳴を聞く…………」

「だめ…………せせら終わらせて、遊びたいから」

「だ、ダメですよー?休んでくれなきゃ泣きますー!」

「トーへんだーーへんだ」

それから山田先生と世間話していると手術らしきものが終わったらしく、片付けを行っていた。

山田先生もそれを手伝い始めたので暇になつた。

(山田先生、会話して彼の気をそらしてくれてありがとう)やつこま
(えつ、こえ特にお役にたてなくてすいません)

す

(いえいえ、ああいうハプニングでパニックになつたり取り乱したりするものなんです。それを貴女が会話してくれたおかげで大分抑

えられたよつで、彼の精神の強さも凄まじいものですが……（

（あはは……ですよねえ、普通自分の体があんなことになつてゐるのをみたらパニックなりますよね……。岡山くんはイロイロと悔れないです）

「何ですか？ ていうか帰りますね」

「あ、はい。……つてちょっと、ダメですか？」

立ち上がり、手術を受けた服のまま出口の方に歩いていく。山田先生が何か言つていたが、手首にチエーンがあるのを確認してドアを開けた。

「…………先生…………ん？」

「ん？ 何どうしたの？」

皆から変なものをみるよつな目で見つめられた。

下の方に視線を落していつて血の後がベツタリとついてる所に視線が集まる。

するとみんな暗い顔をした。

「…………？」

「岡山くんまだダメですよ！ 絶対安静なんですよ！ ？」

「あら、山田先生。ハハト、はやつぱり？」

「森永ですね！甘くて心もホカホカになりますよね～、私は冬一日一杯は飲みますよ？」

「岡山、平気なのか？」

「ええまあ」

「なかなかの生命力だのう。ブルーティアーズの破片がもう腹に突き刺さつたといふのに」

「こわなりエエヒ呼び出されたかい？」

「えつ？私達のワコアッシュ…や……」

「違ひぬ」

「……？それよりも美佳の所に言つてあげたらどうじや」

「……あははは、やうある。じゃあいらむー！」

そうじつて駆け出す。

後ろからてつちやんとありますがついて来てるのがわかる。恋はのんびりくるだらう。

「いりー岡山くんは重傷患者なんですから走らないでくださいーー。聞いてますかーー？」

聞こえない聞こえない。

できるだけ速く走る、寮の廊下に突入したらもつとスピードをあげる。

階段は何段か飛び越える。

尋常じやない動きをしてるみたいで女子はキャーキャー叫んでる。

「美佳ー、いるー？」

部屋に入りながら声をかけるが返事がかえってこなかつた。
電気をつけて奥に歩いていくが誰もいなかつた。

(…………保健室か？いや、でもここに美佳の気配があるしなあ。 て
つちゃんに気配探知を教えてもらつてから人探しはおちやのこせい
せいなのに)

もつ一度ミニマム娘の気配を探す。

今度はようつ正確にしるために目を開じて集中する。

(…………うーん。 この部屋なんだよなあ…………もつと正確に)

ガチャ

「…………えつ」

シャワーから初田と同じ格好で上がってきた美佳子、「気づかないで集中し続ける。

とこりかみどりは集中すると周りへの対応がめんどくさいから聞き流しているのだ。

(…………ん~?近づいてる。」「ーん!マイチ場所がわからんないなあ)

がばつ!

「おわーー。」

「みどりみどりみどりみどりのバカ!心配したんだからー。」

「「」「」めんどくさ。ちゅうとーひよお呼ばれしてさ」

「バカ……一人にしないでよ……(ボソ)」

「なに?」

「なんでもないわよー。」

「じゃあもう寝ない?疲れちゃって」

「…………ん、一緒に寝てくれたら許す

「お前は何いってんだい?その格好の君と一緒に寝の氣せなこと?」

「ウニヤニ」

۱۰۷

「痛い！これは痛すぎて笑える！」

「なら笑いなさいよー！」の変態！」

「失礼なこのあほ……！」

言ひ争つてゐると、ドアが開く音がした。
とつさでママ娘にシーツを巻き付け、ベッドに放り込む。

「おい、平氣か？」

「あんた怪我人なのに無茶しそうよ?」

111

内心穏やかぢやないけど、平静を装わなきやうじで公開死刑が行われてもおかしくない。

他人が死ぬ分には構わないけど、俺は死にたくない。

「……美佳、シーツだけみて」

「……えつ！？何言つてゐるのあります！」

「…………みどり、まさか怪我を利用して美佳にそんなことを」

「そんな」としません。シャワーから上がってきたとれい、とても言えないような格好だつたから緊急措置をしたんですね」

ハーマム娘は顔真っ赤にしながら頷く。

そして次の瞬間、触れられたくないことに触れられた。

「なんで！」、ベッドが一つしかないんだ？もしかしてお前達添い寝してるとか？」

『緊急事態発生！本音、みんなに報告。現時刻をもって撤退！』

了解

だだだだだだ
。

.....

ほてほて

『新文庫』

ほほほほほほほほ

Г Г Г Г

てつちゃんは視線を天井に、俺は窓辺に行き空を、美佳は下を向き、ありす横を向いた。

これはあまりよろしくない状況。

「哲」

「すまない。なんとか誤解はとしておいた。横に置いてある布団を見て申し訳ないと思った」

卷之三

ドアがゆっくりと控え目にあいて、ちゅうとの隙間から恋がヒュイヒュイと入ってきた。

ホッキーを加えていたのでのほんさん（一夏命名）とあつたのは間違いなさそうだ。

「みどりと美佳が添い寝してて、夜はいつも大人の娯楽をしてると聞いたのじゃが、ほんとかの？」

「許せみじりー待て死ぬ死ぬお前の本気せやばーからーー。」

日記

入学5日目、てっちゃん3／4殺し

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262z/>

馬鹿ですが何か？

2012年1月8日20時45分発行